

マカルー東稜に挑む 日本山岳会マカルー登山隊 1995

隊長 重廣恒夫



マカルー東稜-岩と氷の壁が頂上まで続く……

残された未踏のルート東稜
標高八四六三メートル、世界第五位の高峰マカルーは、チベットとネパールの国境、北緯二七度五三分二三秒、東経八七度〇五分二九秒に位置する。最初にマカルーを間近に見たのは一九二一年の英国の第一次エベレスト登山隊であった。さらにマカルーの西麓を流れるバルン氷河に最初に足を踏み入れたのは一九五一年シンプトンとヒラリーであった。一九五三年エベレストの登頂に成功したヒラリーは、その山上から南東二十キロメートルに位置するマカルーを望見、登頂の可能性を探った。そして一九五四年春にはアメリカ隊とニュージールランド隊が挑んだが、事故や天候に恵まれず、マカルーの頂上に手を掛けただけで終わってしまった。一九五五年、前年秋の偵察を行ったフランス隊は、ジャン・フラン

コ隊長以下十一名で編成され、北西面の最終キャンプからの波状攻撃で、登山隊員全員が初登頂するという快挙を成し遂げた。
これは人類最初の八〇〇メートル峰登頂となったアンナプルナ以降、驚くべき進歩を見せたフランスの高所登山研究の成果であった。
以来、一九七〇年の日本山岳会東海支部の南東稜からの第二登に続いて、今日まで八つを越えるルートからその頂きが踏まれている。
しかし、これだけポピュラーになっ

てしまったマカルーにも唯一未踏のルートが存在する。ガンジス河につながるアルン川から派生したカルマ谷に落ち込む長大な尾根、それが東稜である。
一九二二年、エベレストの登路を求めてカルマ谷とカンシュン氷河を探ったマロリーたちに望見されて以来、恐



1994 年 (平成 6 年)
8 月号 (No. 591)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

マカルー東稜に挑む……………	1
蔡禮樂氏を囲んで……………	3
海外の山……………	3
追悼・名誉会員廣瀬潔氏……………	4
20歳代入会者数の推移……………	4
報告	
第3回青森ウエストン祭……………	5
若葉会山行……………	5
古き道を探ねて……………	6
三水会・4月現地集會……………	6
二火会・現地見学会……………	7
自然観察山行……………	7
支部だより……………	8
岐阜 秋田 山形 福岡	
自然保護随想……………	9
図書紹介……………	10
山と医療……………	11
書籍受入報告……………	12
新入会員 住所変更……………	12
東西南北	
雨の面白山紅葉川……………	14
「自然保護随想」にも申す……………	14
スイス・ベルン大学山岳会93年度	
年報に寄せて……………	14
短歌・5月の遠見尾根……………	15
ウエストンと大町の民家の写真16	
会務報告……………	17
会員異動 ルーム日誌	
INFORMATION……………	18
▶日本山岳会事務取扱時間	
月・火・木・土曜日	10~20時
水・金曜日	13~20時
▶図書室開室時間	
日曜・祭日・月曜日を除く毎日	
13~20時	

マカルー北東面概念図



総隊長 藤平正夫
隊長 重廣恒夫

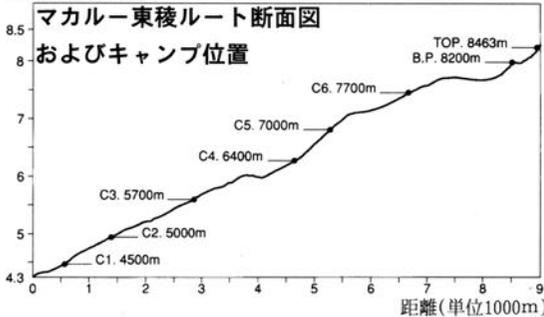
三、隊の構成
偵察 一九九五年二月中旬～三月中旬
(ただし本隊と継続)
本隊 一九九五年三月初旬～五月下旬

二、期間
さらには八四六三メートルの頂上まで険しい岩稜が続く、全長十キロメートルにも及ぶ長大な尾根である。

マカルー峰北面(チベット側)からのポーラメソッドによる初登攀を目指し、未踏の東稜をたどる。東稜は四三〇〇メートルの末端から七〇〇〇メートルまでの岩と雪のミックスした壁と

らく東稜は七十数年の間、深い霧のベールに閉ざされていたのである。
■登山計画の概要
一、ルート

高度(単位1000m)



- 登山隊長 山本宗彦
登攀隊員 十名
医師 一名
マネージャー 一名
通訳 一名
気象 一名
連絡官 一名
中国人通訳 一名
ネパール人高所協力員 十三名
ネパール人コック 一名
ネパール人キッチンボーイ 一名
四、事務局 一名
〒一〇三 東京都中央区日本橋小舟町 七一二 読売日本橋別館五階
TEL 〇三―三二四九―五一八六
FAX 〇三―三二四九―五二一六

物資と装備の種別・数量・重量リスト

キャンプ	BC	C1	C2	C3	C4	C5	C6	BP	合計
高度	4100m	4500m	5000m	5700m	6400m	7000m	7700m	8200m	
最大収容人員	32	24	15	12	9	12	6	3	
延べ滞在人員	670	264	258	201	117	102	18	6	1636
テント数	11	8	6	6	4	4	2	1	42
露営具重量	240	120	75	60	45	60	30	10	640
食料重量 (含ガスボンベ)	1340	528	516	402	234	204	36	12	3272
燃料	638	228	282	186	141	111	18	6	1655
ガスボンベ数									
通信機	50	7	20	20	6	20	6		129
登攀具	24	124	192	240	116	188	236	10	1128
医療用品	50	10	10	5	5	10	3	2	95
酸素器具	30			30		30	60	15	165
写真機材	30		10	10	5	5			60
気象観測機材	100								100
個人装備	990								990
合計	2845	789	829	767	411	517	371	49	6587
累計重量	6587	3733	2944	2115	1348	937	420	49	

日程表

月日/行動	月日/行動	月日/行動
1 2・15成田～北京	34 20	67 22C5建設
2 先発隊16北京	35 21～ BC	68 23
3 17北京～成都	36 22	70 25
4 18成都～ラサ	37 23	71 4・26C6建設
5 19ラサ	38 24	72 27
6 20ラサ	39 25BC～C1建設	73 28
7 21ラサ～ルクズ	40 26	74 29
8 22ルクズ～シガ	41 27	75 30第2期終了
9 23シガ～ユバ	42 28	76 5・01
10 24	43 29C2建設	77 2第3期開始
11 25	44 30	78 3
12 26	45 31	79 4第1次登頂
13 27	46 01	80 5第2次登頂
14 28	47 02	81 6
15 29	48 03	82 7
16 30	49 04	83 8
17 31	50 05	84 9
18 1	51 06	85 10
19 2	52 07	86 11
20 3	53 08	87 12
21 4	54 09	88 13
22 5	55 10	89 14
23 6	56 11	90 15
24 7	57 12	91 16
25 8	58 01	92 17
26 9	59 02	93 18
27 10	60 03	94 19
28 11	61 04	95 20
29 12	62 05	96 21BC～
30 1	63 06	97 22
31 2	64 07	98 23
1 3	65 08	99 24
2 4	66 09	100 25
3 5	67 10	101 26～カルタ
4 6	68 11	102 27カルタ
5 7	69 12	103 28カルタ～シガ
6 8	70 01	104 29シガ～ルクズ
7 9	71 02	105 30ルクズ～ラサ

蔡禮樂氏を囲んで

去る六月三日、来日中の中華民国山岳協会の蔡理事長ご夫妻をお招きしての夕食会が、過日の訪台登山団有志と関係者により、東京・八重洲の富士屋ホテルで開かれた。

当夜は、遠路名古屋から平林会員が参加され、平沢勲氏(当会名誉会員、故平沢亀一郎氏子息)の特別参加もあって、なかなかの盛会となった。

席上、藤平会長は、先般実施した訪台登山の成功に言及され、蔡理事長並びに中華山協関係者のご協力に対し、満腔の謝意を表する旨挨拶された。出席者十六名。
(木村俊博)



蔡氏夫妻と訪台登山団有志

海外の山

モンゴルの山を スキーで

江本嘉伸

点の谷間に降りして飛び立ってしまった。ツアー会社が企画したようにはいかないのが、モンゴルの山旅の持ち味なのだ。頼りにしていたコック、ポーターを乗せた荷運び用のトラックも来ない。やむなくテントを張って、翌二十日は付近を偵察、ベースキャンプの位置を確かめた。

二十一日、近くの遊牧民のラクダを二頭雇って荷を運んでもらい、川沿いに七時間をかけてモレーンに登り、ベース予定地を見渡せる場所に幕営。翌朝、すぐ近くにトラックが来ているのをみつけた。ともかく待望のベース入りはできたが、そこには五人のイタリア隊がいて「許可はオレたちだけのはずだ」と言われる始末。登山が外貨稼ぎになると知ったモンゴルでは、目下新興のいろいろな旅行会社や組織がそれぞれのチャンネルで外国の登山グループを受け入れており、それは必ずしも定まった規則に基づいて実行されているわけではない。

七月二十三日、快晴。ベースを出発し、主峰フィットウン・オーラ(地図には四三七四メートルと表示されている)につながる氷河を歩いて三・五二五メートル地点に第一キャンプを設営した。二十四日午前七時五十

分、C1出発。牧野はスキーで、他のメンバーはコンティニアスで慎重に登り、十二時十五分、南峰、午後一時過ぎには中央峰に登頂した。「やれ、登ったぞ、と嬉しかった。スキーでこの山に登頂したのは世界で初めてだと思います」と牧野。六年には、中国・新疆のムズターク・アタ(七五四六メートル)のスキー登頂を果たしている。

体調を崩した一人を除いて全員が相次いで登頂し、快晴の頂上を楽しんだ。下山は、スキーの牧野は北側斜面を下る。一時間でC1までおりてしまった。

モンゴルの山を長年めざし、一度は出発直前に中止を通告されたこともある東京外国語大学山岳部が、初めて八人のメンバーをハルヒラー峰(四二〇〇メートル)に送ったのは一九六八年である。ここ数年、「民主化」にともなう市場経済路線が進められる中でアルタイの山々は外国人に一齐に門を開いた。医大に入る

夏休みをどう使うかは、円が強くなった、旅好きの日本人の楽しみの一つだ。九四年の夏、東京・杉並に住む医師、牧野総治郎(四〇)の体験は、そんな中でも時代の変遷を感じさせる贅沢なものだった。彼は、モンゴルの最西部、バヤンウルギー県のタバン・ボクド山群の最高峰にスキーで登頂し、頂上から滑降し……。「スキー・アルピニズム研究会」のメンバーでもある牧野は、ツアー会社の企画に集まった六人(うち女性二人、ツアーリーダーを含めて日本人は七人)の一人として七月十八日ウランバートルに到着した。十九日、モンゴル人通訳、ガイドとともに飛行機で西部のバヤンウルギー県に飛び、翌十九日国境警備隊のヘリで標高三〇〇〇メートルのベース地点に向かった。

しかし、雲が出てきた、との理由でヘリは一行を二三〇〇メートル地

前、外語大山岳部のリーダーをつとめたことのある牧野が、ツアーの一員としてタバン・ボクド山群に行き、スキーで登頂してしまったことに、時代の大きなうねりを感じるのである。

追悼 名誉会員・廣瀬潔氏



中村純二

会員番号九三二番の廣瀬潔氏は平成六年五月二日、老衰のため東京医大病院で亡くなられた。九十七歳であった。遺言によって、逝去は四十九日の忌明けまで発表されず、六月十八日になって、同氏を最後までよく看護された松村潤会員から、本会および名誉会長をされていた山の気象研究会とに通告がなされた。後者ではちょうどこの日が第三十八回総会に当たり、会員一同黙禱を捧げ、しばし回想にふかった。

廣瀬さんは明治二十九年十二月八日、東京御徒町に生まれ、旧制第七高校造士館を経て、東京帝国大学経済学部を卒業。大正十一年三井銀行に入社、昭和二十五年定年退職された。趣味は登山とスキーで、生涯をかけて山の気象研究とスキー場の創設を行ってきた。

昭和初期、富士山頂の気象観測所開設に当たっては、野中至氏とともに大いに尽力された。昭和十四年三月には富

士山頂から御殿場口に向かってスキー滑降を行い、滑降標高差二〇〇〇余メートルという当時の世界新記録を樹立された。この日、七合目からは深田久弥氏らも滑降に加わった。当時、麻生武治、黒田正夫、猪谷六合雄、畠中善弥氏らも親しいスキー仲間であった。

山の気象については、昭和三十一年「山の気象研究会」を創立、約三十年間会長を務められた。定年後は趣味と職業経験をいかして、強風や雪崩の少ないスキー場の創設を目指し、志賀高原はじめ国内三十余箇所のスキー場の設計に専念された。

環境保全にも熱心で、尾瀬には大正時代から入り、平野長蔵翁らとともに尾瀬の自然美と学術的価値の紹介に努められたりした。

昭和六十二年、本会の名誉会員に推薦された。

廣瀬さんの最後のスキー滑降は、昭和六十年、自身の設計になる法師温泉スキー場であった。静子夫人とのダイヤモンド婚を記念し、地元の人々に温かく見守られての滑降であったが、夫人も平成二年八十八歳で亡くなられ、現在はご長男の洋一氏が代々木のお宅を守っておられる。

資料委員会では記念のスキーなどを、ご寄贈いただく予定になっていることを記して、洋一氏に感謝申し上げますと

ともに、廣瀬潔名誉会員のご冥福を心からお祈り申し上げる次第である。

二十歳代入会者数の推移

中村 昭

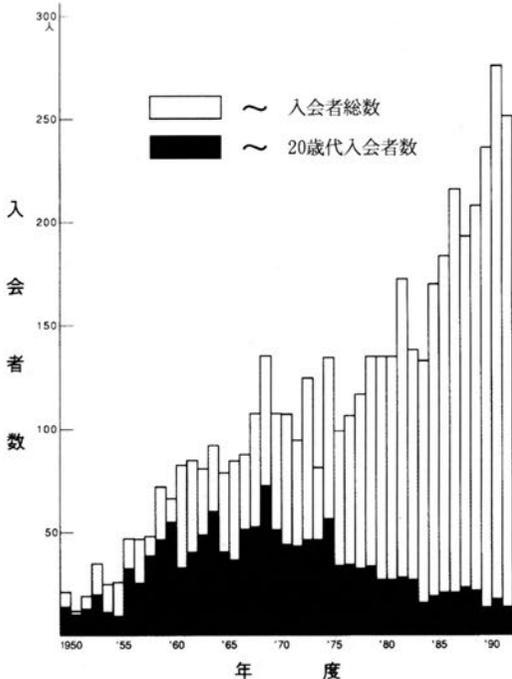
老若男女の別なくスポーツが楽しめる国は健全である。わが国も近年、生涯スポーツの意義が論じられ、ライフスタイルに組み込まれることに不自然さがなくなってきたが、中高年登山者も目覚ましく増えており、登山がその延長線上にあるとすれば、誠に喜ばしいことである。

そうはいくものの、若者の山離れが言われたして久しい。これが一時的な

現象なのか、趣味の多様化の結果なのか、あるいは、若年齢層の絶対数の減少のためなのか。我々中高年齢世代としては「種の保存」的立場からみると気になる状況である。昨年十一月から本年二月にかけて、青年部主催の大学山岳部監督者会議および青年登山懇談会が開催され、総務委員として書記を務めたが、この現象に改めて興味を持ち

過去四十年にさかのぼって、年度別の入会者数とそこに占める二十歳代の数を調べてみた。それをグラフ化したのが別図である。この図をいかに読むか、会員諸氏の率直な感想をお聞かせいただければ幸いです。

1994年5月14日現在JAC
在籍者の年度別入会状況
(1950~1992年)



第三回青森ウエストーン祭

支部設立記念・ 若葉会合同山行

青森支部

ウエストーン祭をきっかけに、昨年結成された日本山岳会青森支部の設立記念山行と若葉会の合同山行が、第三回青森ウエストーン祭に合わせて新郷村で行われた。関東、東北、青森を中心に約二〇人が集まり、八甲田山と戸来岳に登り、みちのくの山を堪能した。

五月二十八日(土)、昨日からの心配していた大雨も上がり、雲脚が早いものの青空が広がった。酸ヶ湯温泉の宿泊組と東京からの大型バス、地元のホテルが合流し、九時二十分、長旅の疲れもみせず、すぐ八甲田大岳へと登り始めた。毛無岱では湿原の木道をたどる。定期的に高山植物には早いものの、花の時には訪れる登山者を楽しませてくれるだろう。植物相もアオモリトドマツ林からダケカンバ、ガンコウランなどに変わる。心地好い風の後押しされ、十一時四十五分、大岳頂上に着く。

岩木山、下北、津軽半島の遠い山も新緑に輝いていた。三六〇度の展望を楽しむ。仙人岱で昼食後、二時、酸ヶ湯温泉に無事着く。健脚ぶりには驚かされる。二時半、八甲田を後に十和田湖を經由して新郷村に向かう。

第三回青森ウエストーン祭は午後四時半から、村民も含め一五〇名が参加しウエストーン友の会会長の戸来彌氏(会員)宅で行われた。今回はウエストーンのレリーフへの献花などに加えて「三つのことば」の碑の除幕式が行われた。山田二郎前会長、中村純二副会長、木村弥太郎村長(会員)、戸来会長の四人が除幕すると、「命を大切にしよう、仲間を大切にしよう、自然を大切にしよう」の文字を刻んだ碑が現れ、参列者から拍手が起こった。三つのことばは山田前会長が会長就任時に会員に向けて訴えたスローガンであった。

夕方七時より新郷温泉で懇親会を行った。地元松島支部長、木村村長より歓迎のことば、中村純二副会長、小倉常務理事の挨拶や、東北各支部よりエールをいただいた。また参加者の中から、遠くは名古屋の妹尾ご夫妻、岐阜

の藤井氏、最高齢の片岡氏らよりスピーチをいただいた。山菜料理などを地酒とともに賞味し、夜遅くまで懇談。

翌二十九日(日)、東京へ帰る時間に合わせて四時起床。五時、登山グループと山菜採りに別れ、マイクロバス三台に分乗し移動。六時、兎平登山口を出発した。広々としたブナ林の登山道を進む。ダケカンバが見えてくる八五〇メートルより急登になる。階段状の直登では、昨夜のアルコールが大汗となり、反省させられる。道が平坦になると、大駒ヶ岳山頂である。コマツツジやイチイ(オンコ)の矮生木が見られる。これより体力のある人は一等三角点の三ツ岳(一一五九メートル)へ向かう。この二つの山を合わせて戸来岳と呼んでいる。八時、ギョウジャニンニクの臭いのする山頂に着く。灌木帯の山頂からはぐるりの展望が得られ、岩手山さらにはその奥の山々の山岳同定にしばらく話が弾む。同じ道を引き返し、十時、登山口に帰る。

十時半、平子沢の謝恩碑の前で山開きを兼ねた式典が開かれる。木村村長、中村副会長より挨拶があり、飢饉で喘いでいた村民に国境を超えて救援の手を差し延べたウエストーンの遺徳をしのぶとともに、登山の安全を祈り、自然の大切さをかみしめた。式典終了後、地元酪農家より冷たい牛乳がふるまわ

れた。また村から山菜のお土産をいただき、午後一時、東京に向けて出発した。

終わりに支部設立記念山行に遠路ご参加いただきありがとうございます。おかげさまで晴天のもと、山の友情を深め、盛会裡に終わることができました。地元新郷村の皆様のご懇篤と、松田雄一前副会長、集会委員会の中川理事、そして委員の皆様のお心遣いにお礼申し上げます。参加者 首都圏会員七十二名、東北各支部九名、青森支部二十四名、新郷村(山岳会)十二名の計一七名。(中村 勉)

若葉会山行

青森の八甲田山・戸来岳

集会委員会

前日の大雨が信じられないほどの晴天で迎えられた五月二十八日、酸ヶ湯温泉に百名を超える会員が集まった。新しく設立された青森支部と合同での若葉会山行。九時すぎ酸ヶ湯温泉横から順次登りはじめる。

樹林帯をひと登りすると視界が開け、毛無岱の湿地帯となる。八甲田ロープウェイ駅から田茂池へ赤倉岳、井戸岳そして大岳が目の前に稜線を連ね、振り返れば猿倉岳、駒ヶ峰、櫛ヶ峯の峰々、その後ろ、はるか遠く雲の上に岩



ウエストンの謝恩碑前に勢揃いした若葉会山行参加者

木山が浮かんでいる。足もとは高山植物には少し早かったけれど、チラホラ水芭蕉が白い花を見せてくれている。景色も気分も最高で、三々五々話をしながら登っていった。
大岳の頂上は風が強く、長居は無用と早々に下りる。ガラ場をドンドン下り、雪面にたどり着いた。数人のスキーヤーが登ってくるのをうらやましく横目で見ながら仙人岱に着く。もうお弁当を食べている人もあり、私もお昼にする。青空に硫黄岳、高田大岳、小岳、大岳が雪の頂きを輝かせ、赤い屋根の仙人岱ヒュッテ、そしてアオモリトドマツの緑と清流の素晴らしい眺めの中でひろげるお弁当は、なんて贅沢

ただ今回の若葉会は盛りだくさんで、これから青森ウエストン祭に行くことになってるので、ゆっくりできないのが残念。食後、休む間もなく走り下る。

酸ヶ湯温泉を後にして、奥入瀬渓谷も十和田湖も見物どころではなく、一路新郷村へ向かう。予定より三十分遅れて到着。史跡ウエストンの宿で、第三回青森ウエストン祭が開催された。山田二郎元会長は会長就任挨拶のときから提唱された ①命を大切にしよう ②仲間を大切にしよう ③自然を大切にしよう と三つの言葉を話された。

終わりに「青森ウエストン友の会」の誓いの言葉 ①在日外国人の方々が飢饉の際、差しのべられた温かい手にこたえる ②救援活動に献身されたウエストン師が世界的な登山家であっただけに、山麓の村人としてお手伝いできることについて、会長の戸来彌氏のお話があった。その後、青森の無形文化財である金ヶ沢鶏舞が奉納され、閉会。

翌二十九日は、青森支部設立の記念山行が行われた。私は初めての戸来岳登山。山菜採り組と別れて四時起きで出発。今日も晴天である。急登に汗かき大駒ヶ岳に着く。ここで折り返す人もあったが、主峰の三ツ岳まで一時間の往復をして下りてきた。

途中シラネアオイやツツジ、ミネザクラなど若葉に彩りを添えて目を楽しませ、山菜を採りながらの山行は疲れを忘れさせてくれた。最後に、碑の前で改めてウエストンの業績を知らされた。若葉会はお天気に恵まれ、充実した二日間を終え、それぞれの思いを持って散会した。青森支部の皆様、お世話になりました。 (織田沢美知子)

古き道を尋ねて 新緑の山腹散策

図書委員会会

六月十一日、萌黄から新緑へ木の葉を染めて梢をわたるそよ風とともに、旧甲州街道を相模湖から美女谷を経て小仏峠へ。

明治天皇野点の記念碑と並んで立つ歌碑の傍らで昼食大休息。歌碑には、「来てみれば 蚕飼機織りいとまな

く、甲斐の旅路の、野の辺 山の辺 実美」と歌われている、と茶店の親爺さんが説明してくれた。「秋にまたおいでよ」茶店の元気なオバサンの声に送られて小仏山寶珠寺から小仏の関趾のある裏高尾へ下りる。

七十歳代三人を交えた総勢十二名、このような気楽な会をぜひ続けてほしいとの声があった、山腹縦断の散策でありました。 (飯田進)

三水会・四月現地集會 裏御正体・道志朝日山

四月二十三、二十四日の両日、道志シリーズ第四回の山行を開催した。

二十三日は富士急・谷村駅からタクシーで、桂町、砂原集落を経て鹿留川に入った。山の神を過ぎると、峡谷は清流の川音に包まれ、裏御正体の山城となる。天気予報がよくないので、二十曲峠のコースをあきらめ、国土地理院の地形図にある古道を登ることにした。

裏御正体にはクラミ沢と前寄沢(羽賀正太郎氏資料)の二大支流があり、この分水尾根に古道がある。前寄沢出合で下車し、雨のパラつく中で登山安全と山城安全のために、山神祭りをとり行い、気分をひきしめて入山する。

新林道で古道は消えてしまい、送電塔巡視路を拾って巖戸山に至る。カラマツ植林の尾根には手強いヤブが待ち伏せている。対岸には石割山から鹿留山に続く尾根がゆったりと続いている。その上方に白雪の霊峰富嶽が雲間に銀白に光っていた。

登るにつれてブナが多くなり、風音も強くなる。冷風を避けてヤブの中で楽しい昼食となる。パラつく雨に気を遣いながら進むと、全くヤブのないブ

ナノ原生林に入る。林は小鳥の声以外に音はなく、茫洋として一行を受け入れる。

大森大先輩に先達をお願いする。林床の柔らかさをいたわるように、踏み跡すらない林を登る雰囲気は神聖そのもの。

やがて、山伏峠からの尾根道に至る新しい祠を過ぎると、御正体山頂で、山頂祭りを一時間ばかり行う。南に九十分ばかり急降下すると道志村の白井平に着く。民宿周辺は桜・桃・杏の花や草花が一斉に咲いていた。民宿では七時から山宴となり、窓越しの夜桜を肴に酒を飲み、疲れをいやした。

二十四日は花の里を後に、和出村までバスで行き、義経伝説のあるヤグラ沢に入った。沢筋に入ると雑木林の柔らかい若芽の幕におおわれる。道志口峠に至り、道志連山の尾根となる。霧に包まれた岩戸の峰は静かである。ここから朝日山までブナ・ミズナラ・イヌシデなどの林相を満喫できる。

朝日山は道志連山の中心となる山で、おっとりとした雰囲気を持っている。北川のサンショウ平への吊曾根を快適に歩いた。松風さわぐ尾根を東に下ると、山菜の王者タラノメが歓迎してくれる。二十六夜山を次回に残して秋山村の浜沢に急降下する。帰りは上野原駅に出て解散。参加者十名。(佐藤之明)

二火会現地見学会 城ヶ島・地質観察

関東地方で子供時代を過ごした者たちにとって、小学校の遠足で一度は訪れたことのある城ヶ島で、今日は「地質」の現地見学会です。三月の会では「地質学」について懇切丁寧に解説していただきましたが、何ごとも「百聞は一見に如かず」です。「地層、断層を実際に見たり、ハンマーを使って岩石を採取する(禁止されています)ところが多い」、クリノメーターで地層の走向や傾斜、断層の方向を測る」を目的に、六月五日、京浜急行三崎口駅に集



神戸信和氏の指導で、地層、断層を観察(城ヶ島で)

まったのは、講師の神戸信和氏(元工業技術院地質標本館館長、上智大学講師)と十七名の受講者、内非会員三名、男性二名。

御岳山での親睦会が楽しかったのと、甲府から参加の里見さんは五時起きとか。小原晴子さんは、庭のポトルブラッシュをお土産持参。城ヶ島までのバスでは、夕食の「鯖づくしメニュー」にまで話は弾み、和気あいあいのひととき。

島の西部、温泉ホテル前の海食台地から観察はスタート。向斜構造、地層の攪乱、火災構造、火山灰地、大小の断層、等々。「木を見て森を見ず」、今まで何度も見ていたのは「ただの岩海、砂」といった認識であったのだ!小学生の時にこんな先生に連れてきていただいていたなら「私の人生」の方向も全く違っていただかも、なんて思ってしまうほど「素人はだし」超シロウト」の意味不明であろう質問にも丁寧に対応していただき、ただただ恐縮。今日は「環境の日」、ゴミ拾いをと思いましたが「観光地」は論外。そここの草むら、岩陰、道のわきに弁当がらなどが散らかり、勉強の片手間ではお手上げで、皆で見ぬふりを決めこみ、どうにかレジ袋四つ分ほどを拾いました。

諸磯の隆起地形の見学になったため

「鯖づくし」は次回にお預け、充実した一日の観察会でした。(鈴木裕代)

自然観察山行 堂平から丹沢へ

自然保護委員会

四月二十六日、秦野文化会館で行われたシンポジウム終了後、札掛の丹沢ホームに宿泊。

翌十七日、マイクロバスで堂平登山口まで行く。自然保護協会の森美文氏の先導で、ブナ林が丹沢一美しいといわれる堂平へ登る。堂平からは踏み跡をひろい、三峰山へ登る。

途中、若い鹿の角を一本拾う。丹沢山、みやま山荘裏のゴミ捨て場付近に雌鹿の死骸を見る。死後一週間以内のこと、餓死とみられる(森氏)。

丹沢山頂は、周りだけに草木が残り、中心部は裸地となっている。丹沢山から大倉尾根は、大半、階段状の道である。竜ヶ馬場には休憩用ベンチ多数。

塔ノ岳は、木枠の中に石を積んだ人工山頂になっていた。丹沢まつりのため、人が一杯だった。

雨でも泥んこにはならないが、歩幅を決められていて疲れる階段道を大倉へ下る。

一九九四年四月十七日歩く。参加者十八名。(山口悠紀子)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

岐阜支部 春期懇親登山・毘沙門岳

四月十六日、快晴。岐阜より国道一五六号線を一路北上。長良川の清流を右に左に眺めながら、郡上八幡、白鳥を通過。長良川鉄道の終着駅北農のちよつと先で左折。急坂を一気に登ると松峠である。

峠より南西にゆるやかに延びている尾根の先に、明日登る毘沙門岳（一三八五メートル）の頂上のはっきり見える。標高差はおよそ四〇〇メートル。尾根や谷筋には、真っ白な残雪がたっぷり残っている。天候にさえ恵まれれば、春山登山が楽しめそうだ。なお、毘沙門岳への一般登山道はなく、この時期以外ではかなりの藪漕ぎを覚悟しなければならないとのことである。

峠を後に十分ほど下ると、石徹白に到着する。いたるところで露の藁が顔を出している。四方を山に囲まれた山村石徹白にも春の到来である。上在所の白山中居神社や石徹白杉は、一見の価値あり。夕刻、東京、名古屋、京都など遠方からの参加者も民宿「五左」に到着。定例の支部総会は無事終了した。翌十七日、曇。七時三十分ごろ、お世話になった民宿を出発。松峠で右折し、白鳥高原ゴルフ場（冬はスキー場）に集合。今朝、岐阜方面からお越しの方々と合流。駐車場を使用させてくださった管理人のご好意に感謝する。

八時ごろ、身支度が整った人からリフトに沿ったゆるやかな坂道を、三々五々登っていく。昨夜のお酒がやっと抜けたようで、気持ちがいい。

また、ゆるやかな尾根を登り始める。すっかり固まった雪は快適である。それでも時折、木の回りの空洞に足をとられた人の悲鳴が、あちこちで聞こえる。頂上手前の鞍部（一二〇〇メートル付近）で、尾根からの右側の谷に取り付く。かなり急斜面であるが、ステップを切って、一気に高度を稼ぐ。やがて頂上。残念ながら三角点は雪の下である。

十時ごろ、少し遅れていた人も頂上に到着。さっそく、雪で冷やした缶ビールで乾杯。今回はあいにくの天候の

ため、頂上から白山主峰を眺めることはできなかった。でも、これだけ残雪を楽しめればよしとしよう。参加者四十三名。（江馬 諭）

秋田支部 烏帽子山山行

本年度第一回目の支部山行は、去る六月五日、県南部・雄勝町に人知れずひっそりと聳える烏帽子山（標高九五四・二メートル）で実施、久々に山での親睦を深めた。

この山は、最近まで登山対象として縁遠い存在であったが、山頂部に一等三角点のあることから三角点愛好者？



標高は低いが一等三角点がある烏帽子山山頂で

に注目され、一躍登山界にデビューした。地元役場では遠路なげわざわぎ登りにくるのか、後日、その理由を知り、昨年新たにコースを整備、その要望に応えてくれている。

国道一三号線を南下すると、その名のとおりに山頂部に特徴のある突起が遠眺される。登山口は湯ノ沢温泉の駐車場にあり、すぐ右手の急斜面にとりつく。電光型の道を登りきると尾根筋の道となり、この先、見事なミズナラやヒバの巨木を観察しながら、二つの小ピークを越すとコルに出る。ここから再びミズナラやブナの茂る急登となり、山頂部の一角・高清水の休憩地に飛び出す。この先、平坦な尾根筋の道が続き、最後の急坂を登ると三六〇度の眺望可能な山頂に着く。丁山地や神室山の山並みが美しく眺望される。

この日の朝六時三十分、岡田支部長宅を車三台で出発。途中の神宮寺岳がガスで全山望めないほどの悪天ではあったが、登山開始の頃から晴れ、曇り空ながらも終始眺望を楽しみながら登ることができた。登り三時間。

山頂での昼食時に一時小雨となり、記念撮影も慌ただしく急遽下山。湯ノ沢温泉で一汗流して帰路についていたが、時間の余裕とその後の上天気は誘われて、大曲市に鎮座する霊峰・大平山（姫神岳、三八七・六メートル）に進

路を変更。薬師神社に詣でてから登り、アンテナ塔の林立する山頂から、大曲市街と仙北平野の眺望を楽しんだ。一行「もう一度登るゾー」との冗談も飛び元気で、次回の奥森吉の集会を約して散会した。帰宅十九時三十分。参加者十二名。
(佐々木民秀)

山形支部 春山山行・火打岳

新庄・神室連峰は、そのいくつかの山嶺の標高が一〇〇メートルから一三〇メートルを越える程度である。しかし、冬季間日本海から吹きつける荒々しい風雪の影響を受け、東西は刃刃尾根を形成し、峻険な山々が南北二〇キロにわたって連なっている。

火打岳(一二三八メートル)は、この連峰のほぼ中央に位置する鉾状の主峰である。この火打岳に、数年間の苦勞を重ね登山道が開かれた。新道の開設者は菅原富喜会員である。氏のこの業績に敬意をこめて今回の山行に火打岳が選ばれた。

六月五日、当日はまずまずの天気、朝の七時に参加者が登山口にそろった。メンバーの平均年齢は高い。ただちに始まる胸突八丁の登りは、誰もが息を弾ませ汗を滴らせた。そんな我々に、緑の濃さを増したブナ林、ハルゼミの

甲高い羽摺りの音、野鳥の囀り、高山植物の出迎えがあった。そこをユックリリズムで登って行く。そのリズムは句の笹笛を採りながら登るといふ、ひとときをも与えてくれた。

西火打岳の残雪を踏み、ガレ場の急斜面を登りきって頂上に立った。西風が吹き抜けていた。メンバーの最長老加藤会員が頂上の人となったとき、一斉に拍手がわき上がり、缶ビールで乾杯した。

山頂ではイヌワシの悠々たる飛翔を見た。下山は砂利押沢源頭から砂利押沢出合いに下り、そこから土内川を渡渉して登山口に戻った。膝上まで浸った流れはさすがに冷たかった。深山火打の懐は山の幸も豊かで、下山の途中収穫したミスとアイコを分けあって土産とし、再開を約してそれぞれ家路についた。参加者九名。(高橋 治)

福岡支部 屋久島自然観察登山の 実施時期延期!!

九州四支部では、屋久島自然観察登山を本年十月下旬に実施予定で準備を進めてまいりましたが、諸般の事情から来年五月下旬、シヤクナゲの時期に延期することになりました。計画の詳細は後日お知らせします。

自然保護随想

理想の登山道は

関塚貞亨

昨年十二月の会報「随想」欄に「保全と安全の両立」という題で「首都圏近郊の山々の登山道の整備が悪い

ため、登り下りに危険な箇所が多く、人々が道の両側の草地を歩くようになり、裸地が広がってしまった。環境保全と安全登山の両立のために、人間性にあった登山道を整備する」ように提案し、いくつもの反響があった。

その中に「中高年登山対策が検討されているが、危険な道をピックアップして、関係者に改善を要望するべきではないか」「首都圏近郊の山道では、高尾山から小仏への道の途中にある城山から相模湖へ下る一部が石畳になっているが、石の配列が悪く、最悪の危険な道になっている」とあった。

この道は、東海自然歩道の一部となっており、城山から千木良へ三分の二ほど下った幅一メートル半、長さ二〇〇メートルほどのジグザグの

道だが、十五〜二十センチほどの楕円形の丸石を敷きつめ、その間をコンクリートで固めている。しかし敷石の凹凸が大きく、傾斜も強い。雨の日に石の中央に乗りながら、バランスよく下るのは難しい。滑って後頭部や尾てい骨を打って圧迫骨折、という危険が大きい道である。

丸太の階段の道も悪い。二歩で一段の同じ足だけで登り下りするように造ってある。しかも段差が大きい。さらに、盛り土が流れて丸太の骨組みだけが、障害物のように残った道も多い。本道が歩きにくいために道の側面の草地を歩き、裸地が広がってしまったている。ならば理想的な登山道はどのような道か。止むをえず階段で妥協するとして、専門家によると「段差は二十四センチ以下、長さは足を交互に出せる三十〜四十七センチが望ましい」という。

丹沢の前身、秦野駅から弘法山への途中、権現山公園の道が、その理想に近い。階段は硬質プラスチック製で、ショックは少ない。約六センチの中空の角材の集合体で構成されている。中空の角材は斜め十字に補強しており、隙間に土砂が詰まっている。ともあれ百聞は一見に如かず、である。

図書紹介



カット 中村あや

『二〇万分の一地勢図 基準自然地名集』

これは国土地理院技術資料としてまとめられたもので、二〇万分一地勢図に掲載の自然地名を収録したものである。所在地形図、地名、読み方、メッシュ番号、備考と巻末の自然地名索引、主要自然地域名称図とからなっている。所在地形図は二〇万分一図名と五万分一図の数字。メッシュ番号は三次メッシュで、頭の四桁が一次メッシュの二〇万分一図郭、次の二桁が二次メッシュの二万五千分一図郭、次の二桁が三次メッシュで二万五千分一図を縦横に十等分した区画の番号を示している。このメッシュ番号で地名の位置を示している。備考欄は、山、河川、海など自然地名の種類を示している。同じ「自然地名集」というタイトルでフロップディスクも一般に複製頒布している。

平成三年三月(勸)日本地図センター
発行 七二〇ページ 三、〇〇〇円
(武田満子)

牛丸 工・著 『内野常次郎小伝・ 上高知の常さん』

内野常次郎は明治三十四年の夏、十七歳で初めて上高地に入り嘉門次の弟子となって以来、嘉門次亡きあと昭和二十四年十二月に六十六歳でその生涯を閉じるまで、こよなく酒を愛し、孤独で無欲な自由人であった。上高地の主として約五十年間、多くの岳人に、「常さん」と親しまれ、愛され、さまざまな山の本に登場した。血縁者である著者が、各種の単行本雑誌、新聞などの資料をもとに、著者が幼少時に過ごした常次郎小屋(平成四年七月取り壊し)の思い出から、祖父や父親によって断片的に語られた常さんの人物像を新たな視点からとりあげている。

一九九三年十二月 日本山書の会発行 一〇〇ページ (大橋 晋)
「編者注」限定五〇〇部として刊行されたが、若干残部があるので希望者は「〒186杉並区阿佐ヶ谷北一―三―十六 穂高書房 ☎〇三―三三三六 一〇〇六二」へ。頒価二、五〇〇円。

ピアリー著/中田修・訳 『北極点』

植村直巳の犬橇旅行で私たちに馴染み深くなった北極点は、八五年前ピアリーが初到達した。一生を極地探検に捧げたピアリーはエスキモーの生活様式を採用し、彼らをメンバーに加えた。類いまれな強靱な肉体と周到な準備、敗北を知らないしぶとさが成功に導いた。極点をめぐるドラマは人々の心を魅了して止まない。極地への情熱と厳しさがぶつかり合う中から生まれる人間の本質的な生の意味が示唆されるからだらう。スコット「南極探検日誌」アムンゼン「南極点」に続いて本書が刊行され、極地探検三大古典の全訳の全てが揃った。極地文献の一次資料の邦訳をいつでも手にできる。原文に忠実にマッチする業績といえるだろう。

一九九三年十月 オセアニア出版発行 本文二九三ページ 写真一四ページ(九六点) 折込地図二葉 六、〇〇〇円 (宇都木慎一)

神奈川新聞社編集局・編著 『丹沢 ブナは訴える』

東名高速道路を東京から西に向かうと、最初に迎えてくれるのが大山、そ

の東山腹の樹林が大量に枯死しているのが、肉眼ではっきりと見えるようになって久しい。原因は工場や道路の排気ガス、と判っているが、証拠となる決め手がない。このような現象が、丹沢山塊の至るところで起こっている。それに加えて無用とも思える林道開設、野生のサツキなど貴重な野生植物を埋没させてしまうダムの開発、それに伴う野生動物生息地の狭小、農作物の被害、その他登山者によるゴミのポイ捨て。丹沢山塊は悲鳴をあげている。

この書はその実例を一つ一つ丹念に調査し、他地域との比較もしながら、読者に訴えている。自然破壊への警鐘の書である。

一九九三年十一月 神奈川新聞社発行 一六二ページ 一、五〇〇円 (飯田 進)

Nicholas O'Connell・著 BEYOND RISK Conversations with Climbers

自ら登山者である米人の著者と戦後登山史の中で顕著な実績を築いた十七人の登山家(カシン、ヒラリー、トモ・チェン他)との対話集である。

序説で大遠征隊の八〇〇〇メートル峰初登頂からアルパインスタイル、無酸素、フリークライミングへの移行、

山と医療・中島道郎

1993年制定 UIAA 医療委員会
公認基準について(3)

第1編 トレッキング・
エクスペディション医学

第2章

トレッキングおよびエクスペ
ディションにおける健康管理に関する
契約書の雛形(フランツ・ベルク
ホルト)

訳者解説

欧米のトレッキングやエクス
ペディションに医師が随行する場合、
医師の側とその隊の企画者、引率

者および参加者の側との間に、相
互の責任、権利、義務についての
契約書を取り交わすものらしいが
先般UIAAはその公式契約書
を制定し、その雛形を公表した。

我々日本人はこの契約というこ
とに馴染みが薄く、権利、義務、
責任といったことと全く無関心
であった。しかし世の中が変わる
につれて、今後は随行医師側と隊
員側の相互間にこのような契約書
を交わすのが当たり前になってゆ
くことであろう。全文は長いので
興味のある方は『登山医学』第13
号をお読みいただくとして、ここ
ではそういう契約書というものが
あるということだけを紹介しておく。

「傷だらけの百名山」と
は内容を暗示するよい題
名である。しかし百名山
すべてを網羅したもので
はもちろんない。白馬岳
八ヶ岳、白山、富士山、
槍ヶ岳および周辺、を五
章に分け、その荒廃と開
発の現状、未来図、エ
ピソードなどをまとめた紀
行文でもある。

加藤久晴・著
『傷だらけの百名山』

深田久弥氏は名著「日本百名山」の
なかで「百の頂きに百の喜びあり」と
書いたが、それから幾星霜、本書の著
者・加藤久晴氏は、昨今の荒廃する山
の現状を、深田氏が見たら「百の頂き
に百の怒りあり」と書くのではないだ
ろうか、とこう。
本文では、登山ブームと名著「百名
山」に便乗する官民協調
の観光開発、マナーの悪
い一部のピークハンター
これに迎合して過剰サー
ビスを提供する一部の山
小屋などによって、荒廃
する山々の現状を憂い、
告発し、警鐘をならして
いる。

著者は日本テレビで社会、環境問題
などを取り上げている「ドキュメント
21」のディレクター。本会員。
一九九四年六月 リベルタ出版発行
二三八ページ 一、九〇〇円
(関塚貞亨)

Alan Kearney 著
『Mountaineering
in PATAGONIA』

フィッツ・ロイ、セロ・トルレおよ
びパイネの各山群に絞った、初めての
パタゴニア登山史である。
著者アラン・カーニイは米国西海岸
オレゴン州生まれ、現在もワシントン
州ノース・カスケード山脈の麓ベリン
グハムに住み、文筆、写真および講演
で山岳紹介を続けている。幼少の頃か
らカスケードの山々に親しみ、やがて
カナダ、アラスカ、アンデス、ヒマラ
ヤへと活動の場を広げた。パタゴニア
には一九八一年に初めて足を踏み入れ、
パイネ中央峰南壁の初登攀に成功して
以来通い続けている。

前記の三山群の登山史に各々一章ず
つとり、著者自身の登攀記録であるフ
イツ・ロイのノース・ピラー(一九
八四年)、セロ・トルレル南東稜(同
およびパイネ中央峰南壁(一九八一年)
にも各々一章ずつを当て詳述している。

巻末には簡単なパタゴニア遠征の手引
き、ピークごとの初登攀記録、各山群
ごとの文献リストなどがあり、著者撮
影のカラー写真二十四葉も見事だ。

Cloudcap Seattle 1993 US
\$30.00 一四三ページ(越田和男)

ENCYCLOPAEDIA OF
MOUNTAINEERING
by Wilt Unsworth (1992)

一九七〇年代後半に登場したイギリ
スの山岳百科事典の改定新版。世界山
岳の地理と登攀史のペーパーバックに
収めた便利なハンドブックである。
情報量を誇るには足りない容量であ
るだけに、引く辞典としてよりも読む
辞典として楽しめるだろう。ウエムラ
・ナオミとタベイ・ジュンコが独立の
項目となって登場している。マキ・ユ
ーコーとタグチ兄弟がアイガーとアル
プス登山史の項に名が見える。

ただし「日本」の項に「冬季登山は
千島、樺太でもおこなわれている」と
いう文が見える。日本の登山に関する
情報がどのように、どの程度に伝わっ
ているのか、考えこまされる。
このような反省材料を私たちに思い
つかせるという意味でも興味深い小山
岳事典。(宮下啓三)

書籍受入報告(1994年6月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
益田幸郎・晴子	カナディアンロッカー・ハイキング案内	223pp/26cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
加藤久晴	傷だらけの百名山	238pp/20cm	リベルタ出版	1994	出版社寄贈
武村岳男	東海自然歩道 日帰りハイキング(1) : 高尾山~奥三河	167pp/22cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
天山に逝く刊行 委員会/編	天山に逝く: 追悼 西堀秀二・井上誠・伊東昌彦	218pp/22cm	天山に逝く刊行 委員会	1994	発行者寄贈
吉村千春・他/編	四姑娘山群(スークーニャン): 1992年夏の記録	226pp/21cm	広島山の会	1994	出版社寄贈
塚本圭一・他/編	かがやく峰 KONGUR(コンゲール) 1989年 報告書	95pp/30cm	京都カラコルム クラブ	1994	発行者寄贈
西野喜与衛	源流の呼ぶ声	249pp/20cm	白山書房	1994	出版社寄贈
日本山岳写真協 会/編	雑誌・山岳写真の完成(日本カメラ社) 通巻30号	224pp/26cm	日本カメラ社	1994	編者寄贈
中國登山協會/編	山野行(英中二カ国語版)	33pp/29cm	中國登山協會	1992	発行者寄贈
津野祐次・他	空撮登山ガイド(10): 中央アルプスとハッ岳	92pp/25cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
日本山岳会東海支 部/編	THE CROWN: 日中友好皇冠峰登山隊報告書1993年	170pp/30cm	日本山岳会東海 支部	1994	発行者寄贈
上村信太郎	ニッポン不思議発見(3): 富士山の謎(ワニ文庫E-20)	239pp/16cm	KKベストセ ラーズ	1994	著者寄贈
山田哲雄	私の山日記 Vol. 2	282pp/21cm	私家版	1994	著者寄贈
西丸震哉	原始感覚保持派のための西丸震哉作曲集: 無伴奏合唱曲 (CDつき)	71pp/30cm	楽企画	1994	発行者寄贈
ミニわらち会/編	山雲遙か: 今井田研二郎山日記	31pp/26cm	ミニわらち会	1994	発行者寄贈
小原庄作	我が回想の山旅	263pp/21cm	山路書房	1994	著者寄贈
渡辺兵力	私の登山観(千代田山岳会創立60周年記念講演録 93.11/15)	31pp/26cm	千代田山岳会	1993	著者寄贈
Fred Beckey	Mount McKinley: Ivy Crown of North America	319pp/24cm	The Mountaineers	1993	購入
Andrey Salkeld・他	On the Edge of Europe: Mountaineering in the Caucasus	260pp/25cm	The Mountaineers	1993	購入
Jim Nelson・他	Selected Climbs in the Cascades	234pp/23cm	The Mountaineers	1993	購入
Friedrich Bender	Classic Climbs in the Caucasus: A Guide for Mountaineers	318pp/21cm	Menasha Ridge Press	1992	購入
Jonathan Waterman /編	Cloud Dancers: Portraits of North American Mountaineers	315pp/23cm	The AAC Press	1993	購入
Steve Roper・他/編	The Best of Ascent: Twenty-Five Years of the Mountaineering Experience	384pp/24cm	Sierra Club Books	1993	購入

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。



カット 中村あや

雨の面白山紅葉川

大橋克也

老いたる須佐之男命は考える。昔、八岐の大蛇を退治した頃の俺は、酒を浴びるほど飲んだ翌くる日もバテルことはなかったのに、と。同じように私も考える。若い頃は、朝日連峰ぐらひは一日半で歩き抜けたものだったのに、と。

それが今はどうだろう。髪は亡びゆく草原の如くになり、齒は恐いもの知らずに未知なるものに噛みついた嘗の姿はまるでない。それに土を踏む足腰に、めっきりバネがなくなってきた。登る山も、分を越えぬよう、己をわきまえて選んでいるこの頃である。

六月の中旬に面白山の紅葉川に入っ
た。ここは山麓に達する長い時間を省

略して、いきなり仙山線で溪谷の核心部に降り立つことができる特色がある。クラス会の仲間四人が面白山トンネル入口の藤花山荘に集い、初日は青嵐に囲まれた霞滝周辺を散策して足馴しをした上で、翌くる日、沢の下半を歩いた。

あたかも梅雨前線を刺激した強風豪雨に見舞われ、紅葉川の滝という滝は普段の倍以上の水量で、激しく跳ね、滝壺を沸きかえらせていた。

この狭い谷に突然、数頭の龍が現れて暴れているかのようにであった。特に藤花の滝の白い沫の大屏風には、ただ圧倒されるばかりだった。

悪天候で遂に予定コースを縮めて山荘に戻ったが、躍動するこの日の溪谷から、われわれ老兵達は、なんとなく生きのいい活力を胸の裡に投げこまれたような気分を味わって帰路についた。水辺の細い径に、山椒の匂いが漂っている日だった。

さいわい山形近辺には、老いたる須佐之男でも無理なく、豊かな自然に浸れる山や溪が沢山ある。無理をしないのが果たしてよいのかどうかは、これまた考えさせられることではあるが。

「自然保護随想」にも申す

石田稔郎

「山」二月号の「自然保護随想」を読んで、おかしなことを書く人がいるものだ、と思っていたら、笠井篤氏が四月号に痛烈な反論をよせられた。これに気分をよくしていたら、五月号にまたまた関塚貞亨氏が「環境ビジネスへの期待」と称して、再反論を書かれたので、私も黙っていられなくなってきた。

「山」は山岳会の会報であることを小倉厚、関塚貞亨両氏は忘れていたのではなからうか。業界紙ではないのである。登山者の自然保護論は、山岳における自然破壊や環境汚染を問題にするには環境を悪化させないような保護運動に取り組むことをキャンペーンすることが本筋であろう。

「企業の環境ビジネス」などは、新聞の経済欄を読んでも十分わか

ることで、「山」誌上で教えていただく必要は全くないのである。

こんな考え方を持った方が山岳会の自然保護活動をやっておられるので、自然保護委員会の活動は中途半端に終わっているように見えてしかたがない。一例をあげると、「奥多摩の特別保護地区について、研究したいので都からその地図をもらってくれないか」とある委員に依頼されて、都庁建設局公園緑地部に行き、特別にもらって渡したことが、二年ぐらい前であった。

奥多摩有料道路と「都民の森」は、台風に合うとすぐ崩壊して通行不能となるので、それを研究して、問題として取り上げられるかと思っていたら、一向にその気配がない。奥多摩に限らず、奥秩父の特別保護地区も研究する、と話していたが、どうやらさたやみになったようだ？ 私は腹立たしく思っている。

本来の自然保護随想を望むものである。

スイス・ベルン大学山岳会 九三年度年報に寄せて

岡沢拓吉

スイスのベルン大学学士山岳会年報については、だいぶ昔に紹介された



短歌

五月の遠見尾根

宇都木慎一

けなので、ここでは昨年
の年報だけでなく、少し古いものも参考にして、ABCの動向についても窺うことがで

きるよう紹介してみたい。ベルン大学学士山岳会と日本では表記されているのだが、ベルン大学の場

春山に還らぬ二人の友想う
赤きザイルをかたく結びし

たのもしき音たて小型発電機
薄暮の小屋に温もり満ちす

己が影に導かれゆくごとくにも
斜滑降なす五月の遠見

豊かなる時を過ぎし先輩の
話を聞きて時は過ぎゆく

雲の影雪の肌えにうつりつつ
風おだやかな後立山

燃えさかる暖炉の炎に照らされて
法政ヒュッテの夜はふけゆく

陰影を樹林に刻める山の朝
はればれとして一日はじまる

蒼空に頂稜鋭き不帰の
峰には白き山の連らなる

陽のさして滑らかに山の肌は照り
白馬三山空にかすみり

たのしみつつ山下る日に見上げれば
パラマウント舞う五月の空に

白馬不帰五竜の岳は雪まとい
麓の土は黒々と春

合、実際には卒業していない現役の学生も正会員であり、会長やスタッフもこれら学生がなっているから、正確にはベルン大学山岳会としたほうが正しいように思う。これはスイスの他の大学にも共通していることのようにだ。

セントだったが、今回は四分の三の賛成で、会則を変更するに至った、とその事情を説明している。一九九三年現在の正会員二三人のうち女性は八人で、そのうち一人が今、ベルン大学山岳会の会長を務めている。

ベルン大学山岳会の創立は日本山岳会と同じ一九〇五年なので、来年で創立九十周年となる。年報の巻末にある会員リストによれば現在の会員数は一

三十年ほど前までは、正会員候補者としての期間が一年あって、その間に様々な技能を身につけ、やっと入会を許されるという仕組みになっていた。

二三人で三十年前が一二〇人、二十年前が一二五人、十年前が一一四人だから、会員数には大きな変化はみられない。物故会員と新入会員の数も毎年ほぼ同じ人数で、二、三人。創立以来十八年間

の年報には書かれていた。こういったことが書かれるほどABCも落ちぶれたのかと思ったりもしたが、最新の年報にある会員リストの職業欄を見ると、プロの山岳ガイドが四人もいるし、名誉会員で、スイスのエベレスト遠征隊長だったアルバート・エグラールの

報に載っているそのリストをみると、チンダル、ラウパー、ハスラー、H・デュビ、O・グルトナー、アーノルド

にテスト山行にバスしなければ正会員にはなれなかった、と一九九〇年の

・ラン、ヴィス・デュナンなど日本でも知られているアルピニストが並ぶ。

新入会員の場合、昨年は一人、その前の年がゼロ、一九八五年と一九八九年はそれぞれ九人で最も多い。一九八四年には創立以来初めて、一人だけだが女性会員が入会している。これはスイ

ス山岳会がスイス女性山岳会と合同したことに応呼するもので、この年のABC年報によれば、十三年前のアンケートでは女性の受入れに反対するもの

の五十六パーセント、賛成四十二パー

女性会員が入会している。これはスイス山岳会がスイス女性山岳会と合同したことに

を毎年三、四十回も行っている人がいるのだ。ABC会員という形ばかりの資格でなく、実質的な力のある者が今でも集まっているのだ、ということ

女性会員が入会している。これはスイス山岳会がスイス女性山岳会と合同したことに

を毎年三、四十回も行っている人がいるのだ。ABC会員という形ばかりの資格でなく、実質的な力のある者が今でも集まっているのだ、ということ

女性会員が入会している。これはスイス山岳会がスイス女性山岳会と合同したことに

を毎年三、四十回も行っている人がいるのだ。ABC会員という形ばかりの資格でなく、実質的な力のある者が今でも集まっているのだ、ということ

なのだろう。

このAACBの年報も一九八六年から数年、危機的状况が現れる。紙質が落ち、活字の質もレイアウトも悪く、会を運営していくスタッフも決まらないう年が続いた。毎年この年報を手にしていた筆者も、これで伝統あるAACB年報も休眠かと思った。しかしそんな時でも休刊となることなしに発行され、初登攀の欄が空欄だったことはなかった。ということはスイス・アルプスの山稜のどこかには今なお初登攀と記録されるようなルートがあるということだし、今ではあまり関心を持たれないそういったものにもAACB会員たちは、相変わらず執念を燃やし続けているということでもある。

さらにこの休眠を思わせる時期に、ヒマラヤのカタン(六八三三メートル)に十五人の遠征隊を出している。費用のほとんどは個人負担で、AACBとしての負担はわずかだったらしい。一九九〇年の年報にもスイス・ダウラギリ遠征隊に参加し、登頂を果たした学生の報告が載っているが、これも個人として参加した報告である。クラブヒュッテが三つもあるのだから経済的には恵まれていると思えるのだが、スイスやオーストリアの山小屋と同様、公共施設でもあるから、管理人の給料と管理維持費を補うのが精一杯というこ

となのだ。JACの山研と似たところもあるが、利用率には格段の差がある。山小屋に関しては、日本とヨーロッパでは事情は逆のように思う。

一九八四年の年報によると、AACBはスイス国内の各大学山岳会の連合体をつくり、UIAAの加盟団体になり、自分たちの意見をUIAAに反映させようと試みている。いろいろ問題があったようだが、結局、スイス山岳会の認可を得たうえでUIAAに加盟したようである。このためスイスの大雪山山岳連盟を代表するAACBはその独自性を問われることになった。この年度あたりからAACB年報には山を背景にパラパントやボルダリングの写真が現れはじめる。間もなくAACB主催のボルダリングスイス選手権の模様が紹介されるようになった。もちろんビッグ・レーニン峰登山など、それまでのクラシックな登山の報告もみられるが、数十年前のように、恒例化したようなAACBグリーンランド学術遠征隊の報告が大きく載るようなことはなくなった。

一九九一年の年報にはAACB主催のボルダリング・スイス選手権の報告が写真入りで大きく掲載されている。そこには大勢の観客が動員されている様子、女子の部で優勝したクライマー、スージー・グードの惚れ惚れするような

登攀姿が写っている。アメリカの女性クライマー、リン・ヒルが日本では知られているが、スイスの美人クライマー、スージーはもっと若い。さらに一九九三年の大会では女子の部で優勝したダニエラ・ウイドマーはそれにも劣らず若く、そして美しい。

パラパントで下山することを思いついたのと同様、このような写真を見てみると、何とかして一般の人々の目を自分たちのゲレンデ・愛する山に引き付けようとするAACBの意志、南極ウォーキングも結構、しかし我々は山あつての我々なのだ、といった無言の意志を感じないわけにはいかない。

ウエストンと大町の民家の写真

田畑真一

ウエストンは明治二十六年八月五日、大町へ到着した。島田巽氏をはじめ、川村宏、三井嘉雄、安江安宣の諸氏が紹介(『W・ウエストン年譜』『山岳』第八十二年)するとおりである。

ところでウエストンは明治二十八年頃、英国王立地学協会へ日本の風景や人々の写真二十二葉を寄贈(『New Maps』The Geographical Journal, Vol.6 No.2 1895)した。島田氏らが

紹介するところである。

それでウエストンが寄贈した写真は、現在も同協会に所蔵されていることがわかった。そのなかには大町の民家を写したものも含まれている。詳しくは平成五年八月十九日付け『信濃毎日新聞』の報道(ウエストン寄贈の写真一百年前の信州の山や街)にゆずりたい。実はこの写真がウエストンの関係記事(『日本アルプス―登山と探検』)と符合する。つまり、ウエストンは、「四時には、私達は、大町に着いた。ここは古風な小さな町で、この人家には、日本の山岳地方の特徴である石の重しをつけた広い屋根が、殆どどれもあつた。又奇妙な特色は、全部南向きになっている屋根の煙出しに、障子(紙の戸)がはまっていることである」と述べた。これは写真を文章化したような感じでもある。

こんなわけで、この写真は明治二十六年八月五日の撮影とみることができるとも思えない。ただ、写真のキャプションには「phot. Rev. W. Weston 1895」とある。しかし、ウエストンは同年には大町を訪れていない。これで撮影後、ほぼ二年後に寄贈したことになる。なお、前掲書は一九九六年(明治二十九年)の発行であり、この写真も載っている。さらに遅れて載せたこととわかるのである。

会務報告

六月定例理事会

日時 六月九日(木) 十八時三十分

二十時

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 藤平会長、嶋原、中村各副会長、小倉、大倉、大森、村井、山口、片岡、南川、松浦、伊藤、南井、堀井、渡辺、溝口、中川、大谷各理事、西村、宮下、神崎、重廣各常任評議員

〔委任〕 水野、山本各理事、中島、川崎各監事、斎藤、湯浅各常任評議員

◆議事

〔審議事項〕

一、第二回日本山岳耐久レース「長谷川恒男カップ」(十月八、九日開催)の名義後援について 小倉

都岳連会長から名義後援の要請があった。 承認

二、八十二文化財団からウエストンの写真の転載許可について 小倉

財団機関紙「地域文化」通巻二十九号(七月発行)にウエストン特集を組むので、写真の複写、貸与許可の要請があった。 承認

三、会報「山」の記事転載許可要請について 小倉

小倉厚会員著書「山のエッセイ」周

辺的登山学」(九月末発行予定)に本人執筆の掲載文の転載許可の要請が(株)近代文芸社からあった。 承認

四、東海支部長交替および支部会則の一部変更について 小倉

五月二十五日開催の支部総会(本部から小倉常務理事出席)において、支部長交替(湯浅道男氏から尾上昇氏へ)および支部規則の一部変更が行われた。 承認

〔報告事項〕

一、マカルー登山隊員選考結果について

マカルー峰登山隊実行委員会・嶋原副会長、村井、重廣

六月五日十二時から十五名の応募者(十一名出席)に対し、個別面接の結果、次の六名を隊員として内定した。

荒井俊彦(22 NO 一七四三・法政大学) 岡本 憲(25 NO 一六七三・中央大学) 谷川太郎(26 NO 一七〇五・東京農大)

馬場博行(46 NO 一〇〇〇八・NTT) 山本 篤(31 NO 一〇一三〇・明治大学)

渡辺雄二(43 NO 〇七九一四・中央大学)

なお、応募者のうち四名を隊員候補とし、夏合宿などの後に決定する。また今後適任者がいれば(現在海外遠征中の者など)適宜選考委員会で決定する。

二、マカルー登山隊事務所 小倉

六月七日、読売新聞社島田部長から

連絡があり、六月二十日から使用可能。三、「山の自然学現地講座」受講生の「山研」夏季常駐について 大森

山研委と自然保護専門委で話し合い、自然保護専門委員会で行っている「山の自然学現地講座」の受講生が八月中山研に常駐して、宿泊者の希望に応じた自然解説を行う。本年は一か月試行したい。広報は「山」七月号に掲載。

四、秩父宮記念学術賞について 松浦

九月一日応募要領発表、十一月一日締切りとなっている。昨年の本会推薦の鳥居会員の「自然エネルギー」は二度目だが、その他の推薦については九月理事会で審議し、十月理事会で決定を願いたい。

五、ウエストン祭について 小倉

六月五日、上高地で五〇〇名が参加して盛会であった。藤平会長挨拶、松田前副会長「ヒマラヤを越えるツル」の話があった。

六、第十四回日本登山医学シンポジウムについて 堀井

五月二十七、二十八日、日本エアロビクスセンター(千葉県長生郡長柄町)で「中高年、病気を持った人の登山」がテーマのシンポジウムが行われ、一五〇名が参加し、好評であった。

七、百年史について 南井・山口

文章について、望月、織内、松丸三顧問に連絡をとった。近日中に集まる

予定。映像については羽田会員が当たっている。データバンク調査研究委員会は石田、鈴木、菅田、三上会員で発足した。

八、HATJから 神崎

五月二十八日、定期総会に六十名出席。現在会員は一三〇〇名で、名簿を作成中。ネパール・ルクラに焼却炉を設置したが、運営、アフターケアは地元で行う。八月に一九九四年国際交流

青少年環境体験登山を実施する。

九、会の運営について 嶋原

会務について、九十周年行事、ルームのリフォーム、一〇四号室賃借と費用がかかることが目白押しで、財政面で厳しさが予想される。通信費用、コピー代などにも節約を心掛けて、会の運営に努めてほしい。

十、山研委から 溝口

六月八日、安曇村役場から山研の不動産取得税の請求があり、建物に関しては一応の決着をみた。

十一、リフォーム委員会から 中川

六月十日、施工業者ヤマギワと最終打ち合わせ。七月九日、各委員会は指定の段ボール箱に荷物を梱包し、一〇四号室に移動。七月十六日ルーム全体の引っ越し。九月三日、ビールパーティー、ルームオープンパーティー。九月五日、ルーム開室。

八月十五〜二十日は事務局夏休み。

今年もさくらで会いましょう

その他の日は事務局はいつものローテーションで事務を行っている。

約三十名が各自の計画を持って

【委員会報告】

●青年部 キルギスタン隊打ち合わせ
(五月二十三日、六月八日)、第五次
マッキンリー隊壮行会(六月一日)、
谷川岳合宿・成蹊小屋(六月十一、十
二日)

●総務委員会 支部長会議・総会(五
月二十一日)

●集會委員会 五月二十八、二十九日
若葉会山行、青森支部発会記念山行
(八甲田山、戸来岳)、第三回青森ウエ
ストン祭(新郷村)、関東から七十余
名が参加、一五〇名が出席して盛会で
あった。若葉会山行写真交換会(六月
二十七日ルウム)を行う。ビールパー
ティーとルウムリフォーム・オーブン
パーティー(九月三日)を同時に開催
する予定である。

●図書委員会 「古き道を尋ねて」ハ
イキングのお知らせ(六月十一日、相
模湖・小仏峠・JR高尾駅)

●自然保護専門委員会 五月二十八日
第十一回講座を岡島会員を講師に行っ
たが、この際、六月の環境月間におけ
る受講者各自の活動計画の打合わせを

●資料委員会 ルームリフォームに伴
う資料整理と一時移転(一〇四号室)
を六月一日から行う。毎週一、二回。
山研・展示室のショウケース内の展示
品の一部入れ替え(六月四、五日)を
行う。

●フィルムビデオ委員会 八ヶ岳。天
狗岳周辺の写真・ビデオ撮影会(六月
二十五、二十六日)二十五名参加予定
黒百合ヒュッテ泊。第二回写真展「心
に映る山々」は十一月十九、二十日、
新宿三省堂エントランスホールで開催
される。これについて後援をお願いし
たい。

【新入会員承認】 久保優他二十九名。

■会員異動

▼物故 廣瀬潔(九三二) 6・5・2
清水弥栄治(一〇六六三) 6・6・5
中井修二(二〇六二七) 6・6・12
佐藤武雄(二〇〇七五) 4・5・14
▼退会 加賀美均(一〇四二八) 6・
5・31 ▼終身会員 河西弥一(四
二〇五) 6・6・13 ▼改姓 杉田耕
一(八五八七) ↓加藤耕一

INFORMATION



◆全国支部懇談会

関西支部

平成六年度の支部懇談会を次の通り
開催します。どうぞご参加ください。
期日 十月十五日(土)・十六日(日)
場所 ハチ高原・氷ノ山
会場 パークホテル白樺館(兵庫県養
父郡関宮町) ☎〇七九六一六七
一八〇〇一

日程 十五日 ●受付 十四時〜十六
時 パークホテル白樺館 ●懇
談会 十六時・挨拶 講演「山
樺と加藤文太郎」 支部紹介
懇親会 二十時・二次会(無料)
以上白樺館

十六日 ●登山 氷ノ山登山
Aコース(谷コース) 大久保下
氷ノ山越一山頂一東尾根一福
定 Bコース(尾根コース) 小
代越一太平頭一氷ノ山越一以下

Aコースと同じ 各六時間、福
定十五時半解散、八鹿駅へは路
線バス利用

●但馬観光兔和野高原、木の殿
堂一野外活動センター一瀬川岳
(一〇三九メートル) 登山、加
藤文太郎・新田次郎碑一但馬海
中公園一城崎温泉またはJR豊
岡駅十六時(時間により植村記
念館)

参加費 一〇、〇〇〇円(現地集合、
現地解散原則) 姫路駅十三時発
臨時直行バス二、五〇〇円 但
馬観光バス五、〇〇〇円(先着
四十人まで) 氷ノ山登山は参
加費のみ

申込 期限九月二十五日(一五〇人
締切り) ●申込用紙は各支部ま
たは本部で受取り、参加費を払
い込んでください。振り込み先
は申込用紙に記載。

問合わせ先 二六六二 西宮市仁川町
六一十一 三品方 日本山岳
会関西支部事務局 FAX〇七
九八一五一一〇六七七 ☎〇七
九八一五四一一三七七(夜間)

◆シンポジウム

「登山における疲労の問題」
科学研究委員会・医療委員会
登山と疲労の問題を広い観点からと
りあげたいと思います。

日時 平成六年十一月九日(土) 午後
一時半～五時

場所 青山学院大学(青山キャンパス)

総合研究所ビル十一階会議室

●講師および演題などは九月号に掲載
します。

◆平成六年度年次晩餐会「写真展」

作品一般公募について

フィルムビデオ委員会

先月号の予告でお知らせしたとおり、
本年度晩餐会のイベントとして山岳写
真展を左記の要項で開催します。会員
各位の応募をお待ちしています。

開催日 平成六年十二月三日(土)

開催場所 新高輪プリンスホテル(東
京都港区高輪) 年次晩餐会
会場控室(予定)

展示作品 約八十点。フォトビデオオク
ラブ会員および一般会員か
らの公募作品の中から選定。

〔応募要項〕

作品対象 四季にわたる山岳・自然・
動植物(国内外を問いませ
ん)

応募方法 締切日までに「作品用フィ
ルム」を応募要項に従いお
送りください。

応募料 一点につき五〇〇円。なお
「作品用フィルム」送料は
応募者負担です。

応募点数 何点でも可。二点以上でお

願います。
作品選考結果の連絡 十月中旬(予定)
展示決定作品について 「作品用フィ
ルム」を預かり、展示仕様
に基づき「作品」の作製法
を業者へ一括発注します。
なお製作費は応募者負担で
す。展示作品は「写真展」
終了後、原則として本人引
取りとします。

展示仕様 半切り仕上げ・全紙マッ
パネル張り

製作費 一点につき七〇〇円
●応募ご希望の方はフィルムビデオ委
員会「写真展公募係」まで申し込んで
ください。「応募要項、応募票」をお
送ります。

◆同好会「山げらの会」誕生

昨年、平成五年女性懇談会は、発展
的解散をしましたが、女性会員を中心
とした同好会「二火会」として、新た
に産声を上げました。会員それぞれが
知恵を出し合い、協力しながら、研究
会、講演会、山行など活動を続けてい
ます。

平成六年、女性会員を中心とした会
「山げらの会」が、また産声をあげま
した。クロスカントリースキーで山野
を歩き、自然観察を行い、親睦山行を
しよう、という同好会です。自然発生
的に誕生しました。現在会員は、二十

三名。岩手支部、山梨支部の会員も参
加しています。
会員としての条件は、クロスカント
リースキーをしてみたいという、協調
性のある(心美人)女性。会員二名の
推薦。活動に二回参加してもらい、入
会を認める、会員の自主的な活動を目
指しています。(小倉董子)

◆福岡支部宛書類の送付先変更

福岡支部では事務局長が交替しまし
た。それにともない、福岡支部宛の書
類は左記へ送付をお願いします。
〒八二四 福岡県行橋市道場寺
一〇二四一九 中山 健
TEL 〇九三〇二二二一〇二〇四
FAX 〇九三〇二二二一〇二〇四
(六月二十八日付「事務局長変更のお
知らせ」のうち、中山宅の電話番号、
FAXが誤記されておりましたので、右
のように訂正してください)

訂正 五八九号(六月号) *一ペー
ジ下段最終行「副理事長を」副会長」
に *二ページ一段十八行「柳園空港」
を「桃園空港」に *同二段九行「武
稜」を「武陵」に *三ページの写真
説明を「合歓山北峰」に訂正します。

ルーム日誌

- 1日 青年部
- 2日 学生部
- 6日 連絡委員会
- 7日 図書委員会 アルパイン・スケ
ッチクラブ
- 8日 資料委員会

- 9日 理事会
- 10日 科学委員会
- 13日 アルパイン・スキークラブ
- 14日 二火会 山研委員会
- 15日 三水会 資料委員会
- 16日 学生部
- 17日 フォトビデオクラブ
- 20日 総務委員会
- 21日 フィルム委員会
- 23日 学生部
- 27日 集委員会
- 28日 自然保護委員会
- 30日 マカルー小委員会

6月来室者604名

日本山岳会会報 山 591号

1994年(平成6年)8月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102 東京都千代田区四番町
5-4 サンビュウハイツ
四番町
TEL 東京(03)3261-4433
振替口座 東京3-4829
発行者 藤平正夫
編集人 伊藤 敬
印刷 株式会社 双陽社